

研究ノート

デザインからみる縄文時代後晩期の土製耳飾り

—千葉県我孫子市下ヶ戸宮前遺跡の事例から—

杉山 絢香

千葉県我孫子市に位置する縄文時代後晩期の下ヶ戸宮前遺跡から400点以上の土製耳飾りが出土している。本稿は、下ヶ戸宮前遺跡出土の土製耳飾りを対象に、装飾や形態についてデザインという視点から分析を試みたものである。

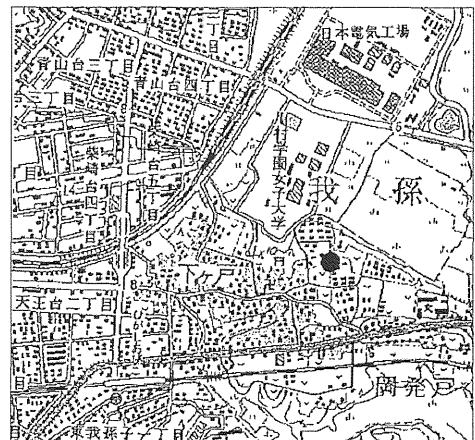
この一群の土製耳飾りは環状形を呈するものが圧倒的に多く、サイズは外径が6cm台の大型の製品が多い傾向にある。耳に装着する際に触れる部分の径を測定した結果、およそ5mmごとに個体の出現頻度が高いという特徴がみられた。このことから、耳たぶの孔が年齢とともに拡張するに従って適合する大きさの耳飾りが製作され、着け替えられていたのではないかと想定した。また、土製耳飾りの形態やサイズと描かれる文様との間に相関関係が認められたこ

とから、年齢あるいは通過儀礼といった要素と採用される文様に関連があったのではないかと考察を行った。さらに、土製耳飾りに描かれている文様には土器や石棒といった他の道具にも共通するものも認められたが、その現れ方は文様の種類によって一様ではなかった。このことから、いくつかの特徴的な文様については、この集落におけるデザインの流行、嗜好、文様選択のルールが反映されたものとして解釈できると考えた。また、土製耳飾りが大型化、すなわち環状化すると、環の内面に文様を描くなど工夫が見られることから、この時期の人々は、耳飾りを装着した際にどう見えるかというデザイン性を強く意識して、文様や形態を選択したものと示唆される。

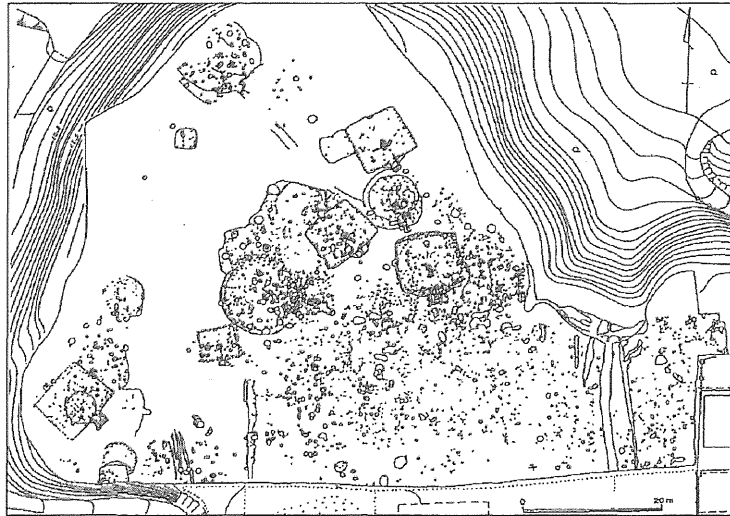
I. はじめに

本稿は、千葉県我孫子市に位置する下ヶ戸宮前遺跡から大量に出土した縄文時代後晩期の土製耳飾りを取り上げ、身体装飾を目的としたアクセサリとしてのデザインの視点から考察するものである。ここで使用するデザインという言葉は、文様や施文方法のみならず、形態、色、大きさ、形状、装飾性、装着の至便性や他者への見えやすさといった機能的な側面も含んだ総合的な観念を示すものとする。

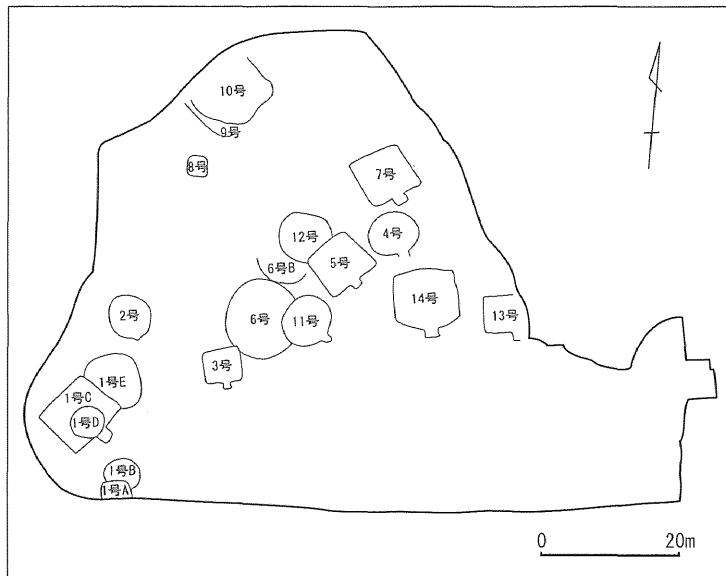
アクセサリの起源は旧石器時代に遡る。旧石器時代のアクセサリについては呪具としての機能が想定されているが、その後は出土数が



第1図 下ヶ戸宮前遺跡所在地(我孫子市史編さん委員会編 2005: 8-9頁; 図1-3より)



第2図 下ヶ戸宮前遺跡全体図
(我孫子市史編さん委員会編 2005 : 126 頁 ; 図 2-54 より)



第3図 下ヶ戸宮前遺跡の住居址
(我孫子市史編さん委員会編 2005 : 126 頁 ; 図 2-54 を改変)

他の道具と比べ極めて少ないことや、素材を入手する際と製作の際に労力がかかることから、それを身に装着する人とそれ以外の他者を差別化するという機能を持つようになったという説もある(春成 1997)。

縄文時代には、身体装飾に用いたであろうと考えられるアクセサリ-の種類や数が増加するため、この頃の人々には身体装飾への強いこだわりがあったと考えられる。中でも、縄文時代中期から晩期にかけて出土量が顕著に増加する土製耳飾りは、その装飾性の高さから、縄文時

代のアクセサリーの中で、際立った位置を占める(土肥 1990)。土製耳飾りは、耳たぶにあけた孔に栓をするように装着するものである。また、この土製耳飾りのデザインは腕輪など他のアクセサリーよりも多様であり、現代の私たちから見ても卓越したものである。

本稿において、土製耳飾りのデザインに注目する理由は、今日までの縄文時代のアクセサリーに関する研究が、文様や形態の分類に終始していたためである。そのため、現代の価値観から、身につけるということを意識した土製耳飾りのデザインについて、文様と形態・大きさとの関係と、流行の有無についての考察を試みた。

II. 下ヶ戸宮前遺跡について

まず、本稿で扱う下ヶ戸宮前遺跡について見てみたい。

1. 立地

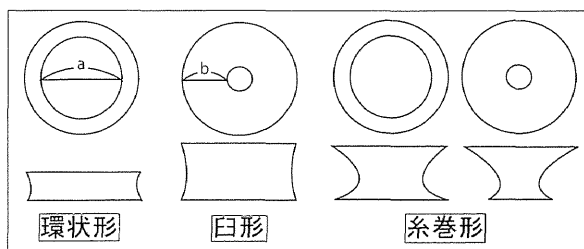
下ヶ戸宮前遺跡は現在の千葉県我孫子市のほぼ中央部に位置しており、北に利根川をのぞむ標高約 16 m から 17 m の台地上にある(第 1 図)。台地は利根川の低地に向かって北西方向に突出した舌状を呈しており、突出部の東側には小谷がある。この小谷を挟み、宇宮前の由来になった八幡神社が存在するが、この周辺は縄文時代晩期の下ヶ戸貝塚として知られている。下ヶ戸宮前遺跡は、この貝塚から北西に 50 m ほど離れた場所になる(千葉県史料研究財団 2000, 我孫子市教育委員会 2005)。

2. 遺構と遺物

下ヶ戸宮前遺跡から検出された主要な遺構は住居址である。計 17 軒の住居址はすべて加曽利 B 式から晩期安行Ⅲ c 式期に属している(第 2, 3 図)。住居址の多くは比較的大型のものであり、最大のもは後期に属する 6 号住居址であった。遺物については、6 号住居址とその次に規模の大きい 14 号住居址の覆土中に貝層が認められ、その中から多くの動物の骨・牙・角や、鳥骨、魚骨、貝殻等が出土している。また、骨角を用いた加工品も多くみられた(千葉県史料研究財団 2000, 我孫子市教育委員会 2005)。

特筆すべきは、406 点という通常の遺跡と比べ圧倒的に量の多い土製耳飾りである。土製耳飾りの出土地点は、住居址に集中していた。例えば、6 号住居址からは 27 点、14 号住居址からは、下ヶ戸宮前遺跡内の住居の中で最も多い 102 点が出土した。14 号住居址は、壁際に住居址をほぼ一周する焼土が見られるため、火災を受けたものと思われる。

また、406 点という膨大な数の耳飾りが出土しているにもかかわらず、下ヶ戸宮前遺跡において、対になる土製耳



第 4 図 土製耳飾りの形態

第1表 遺跡別土製耳飾りの形態別個数

	環状形	臼形	糸巻形	不明
下ヶ戸宮前遺跡	358	38	8	2
千網谷戸遺跡	40	70	49	27
赤城遺跡	28	17	8	1
三輪野山遺跡	30	4	0	0

第2表 出土場所別有文と無文の土製耳飾り

	有文	無文	不明	計
1号住居址	10	10	2	22
2号住居址	1	1	1	3
3号住居址	5	1	3	9
4号住居址	8	14	0	22
5号住居址	42	28	5	75
6号住居址	15	7	5	27
7号住居址	62	27	3	92
11号住居址	0	1	0	1
12号住居址	0	1	0	1
13号住居址	8	0	2	10
14号住居址	57	45	0	102
土坑	5	5	0	10
グリッド	15	15	2	32

で文様を描いているものもある。他2種の形態と比べ軽量であるため、大型の土製耳飾りが多いと思われる。

臼形の土製耳飾りは、孔の直径が表面の幅よりも狭く、側面が高い。孔の直径と表面の幅が等しい場合は、側面が高いものを臼形とみなす。臼形の土製耳飾りは、中が充実しているため、環状形に比べ重量が増す。重量がある耳飾りは、耳への負担が大きいと考えられるため、比較的軽量となる小型の土製耳飾りが多いと思われる。

糸巻形の土製耳飾りは、側面に発達したくぼみがあり、表面面積が裏面面積と比べ広く、側面が高い。糸巻形は、側面のくぼみが特に発達しているが、これは土製耳飾りを嵌めた際の落下を防ぐ工夫であると考えられている。また、表面面積と裏面面積の差は、他者から見られる面、すなわち文様を描ける面を広く取りつつ、土製耳飾りを軽量化する工夫であると思われる。

上記以外に、破損が大きく全体の様相が明らかでないものは不明とした。

以上の条件で形態別の分類を行った結果、下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りは環状形の占める割

飾りは1組も出土していない。一般に、縄文時代の土製耳飾りは対で出土することが稀であることが知られているが、下ヶ戸宮前遺跡においても、同様の傾向がみられた。

Ⅲ. 下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りの特徴

まず、下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りを形態、大きさ、産地の視点から分析し、その特徴を述べたい。

1. 形態

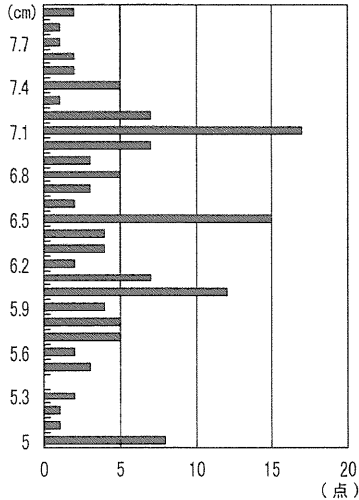
土製耳飾りの形態は、直径、側面の高さ、耳に嵌める際のくぼみの形状から3種に分類できた(第4図)。環状形の土製耳飾りは、孔の直径(a)が表面の幅(b)よりも広く、側面が低い。孔の直径と表面の幅が等しい場合は、側面が低いものを環状形とみなす。環状形は、重量軽減の工夫として孔の直径が表面の幅よりも広くなるために、比較的薄くなる。これにより、文様を描ける面が狭まるため、土製耳飾りの内側にま

第3表 耳にかかる部分の直径別個数

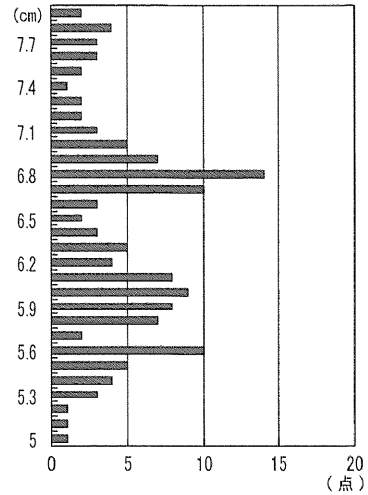
大きさ	～1cm	1cm～	2cm～	3cm～	4cm～	5cm～	6cm～	7cm～	8cm～	不明
個数	1	12	17	19	30	42	64	27	1	193

第4表 内側に文様のある土製耳飾りの大きさ

大きさ	1cm～	2cm～	3cm～	4cm～	5cm～	6cm～	7cm～	8cm～
個数	0	0	0	2	5	7	8	1



第5図 5cm台から7cm台
表面の直径別個数



第6図 5cm台から7cm台
耳にかかる部分の直径別個数

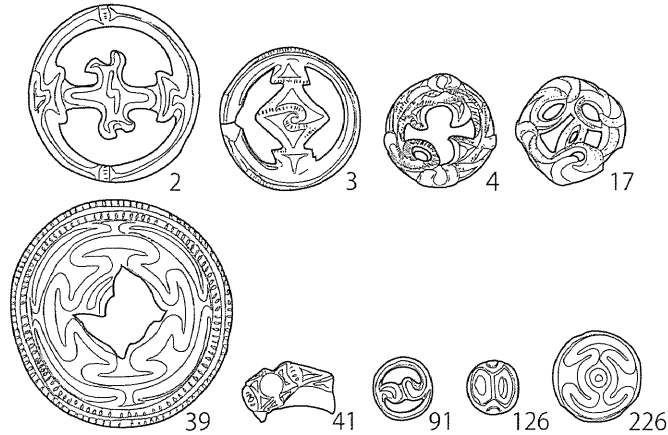
合が圧倒的に多く、全体の88%を占める358点が出土している(第1表)。また、1000点を超える土製耳飾りが出土した群馬県の千網谷戸遺跡(桐生市教育委員会1978)、対になる土製耳飾りが出土した埼玉県赤城遺跡(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1988)、下ヶ戸宮前遺跡の所在と同じ千葉県三輪野山遺跡(千葉県文化財センター1996・2001)と比べ、下ヶ戸宮前遺跡の環状形の土製耳飾りの割合は圧倒的に高い。以上のことから、下ヶ戸宮前遺跡の特徴として、環状形の土製耳飾りの占める割合が圧倒的に高いということが言える。

2. 大きさ

下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りの表面の直径は、1cm台から8cm台にわたる(第2表)。

不明のものを除外すると、最多のものは6cm台の土製耳飾りであり、次に7cm台の土製耳飾りが続いた。他遺跡の耳飾りの直径に比べ、下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りは、大型の割合が高い傾向がみられる。

また、土製耳飾りの側面のほぼ中央にあたる、耳にかける部分の直径も計測した(第3表)。この部分は側面のくぼみの最も発達している部分にあたり、耳の孔の直径に等しくなる。耳の孔は年齢と共に拡大すると考えられていることから、この部分の直径の大きさは年齢に依存、すなわち直径の大きな孔ほど高齢の人の土製耳飾りであったと考えられる。計測の結果、不明のものを除外すると最多の土製耳飾りは6cm台であり、次いで5cm台が多かった。当然ながら、全体の直径と比べ耳にかける部分の直径のほうがやや小さい値を示す。



第7図 他遺跡産の土製耳飾り(筆者作成, 番号は第16表に対応)

直径別個数の多い5cm台から7cm台のものについては、詳細な分析を行った。表面の直径においては6cm台の土製耳飾りが最多であり、その中でも6.0cmと6.5cmの値が高かった(第5図)。次点の7cm台においては、7.1cm台の値が高かった。このように、6cm台と7cm台の土製耳飾りはほぼ5mm間隔で直径別個数の値が高くなっている。5cm台においては、5.5cm前後の値は低いが、5.0cmの値が高くなっていることから、同様の傾向があると思われる。したがって、年齢ごとに土製耳飾りを大型のものにする際は、約5mm間隔で付け替えていったと考えられる。

一方、耳にかける部分の直径においては、6.8cm付近、6.0cm付近、5.6cm付近の値が高く、表面の直径と比べ明確ではないが、個数の集中がみられた(第6図)。

また、下ヶ戸宮前遺跡で出土した土製耳飾りの中には、耳飾りの内側の面に文様が描かれているものが認められた。一般的に、内側は外側と比較して他者から見えにくいと考えられる。そこで、内側に文様の描かれている土製耳飾りを対象に、表面の直径を計測した。対象となる土製耳飾りは、文様の全様が表面から見ただけでは確認し難いもの、または文様の描かれる部分である表面が張り出していないものである。表面は張り出しているが、文様の全様が確認し難いものは計測の対象に含めた。ここで対象とした土製耳飾りは、残存率が高い有文のものであり、全て図版に示している(第12～16図)。

この条件を満たす土製耳飾りは23点であり、表面の直径が最大のものは8.1cm、最小のものは4.7cmであった。直径別個数で見ると、値が高いものは6cm台から7cm台であった(第4表)。6cm台から7cm台の値が高くなる傾向は、406点全体の傾向に類似しているが、文様が内側にあるものには、4cm台前半以下の土製耳飾りが見られない。つまり、内側に文様のある土製耳飾りは比較的大型であるという傾向がみられる。大型の土製耳飾りの場合、重量が装着者の負担になることや土製耳飾りの落下のリスクを高めることが考えられる。そのため、表面を薄くすることで重畳を軽減し、表面を張り出す代わりに、内側に文様を描いたと思われる。また、

小型の環状形の土製耳飾りの内側に文様を描いても、実際には孔が小さいために内側が見えにくいことも考えられる。

3. 他遺跡産の土製耳飾り

下ヶ戸宮前遺跡では、他遺跡から持ち込まれたと思われる異質な土製耳飾りが数点出土した。他遺跡から持ち込まれたとする根拠としては、文様が特殊であること、胎土の質が異なることが挙げられる。文様については、特に細かいもの、立体的であるもの、

他遺跡で出土した文様と類似しているものがある。また、下ヶ戸宮前遺跡から出土している耳飾りの胎土は、砂粒が多いために粗く、赤褐色であるが、それに対し、きめが細かく、砂粒の少ない胎土を持つ土製耳飾りを他遺跡のものとした。

その結果、二つの条件を満たしている土製耳飾りは9点であり、全てが群馬県の茅野遺跡や千網谷戸遺跡文様や胎土に類似したものであった(第7図)。9点中、茅野遺跡の土製耳飾りと類似する文様の見られるものは2, 3, 5, 91, 126, 226であり、千網谷戸遺跡の土製耳飾りと類似する文様の見られるものは4, 17, 41である。砂粒が少なく、きめの細かい胎土で作られた土製耳飾りは他にも数点認められたが、全てが細かい破片であり、胎土の差だけでは他遺跡のものとは断定できなかったため、ここでは数に含めなかった。

下ヶ戸宮前遺跡出土の耳飾りの総数406点に対し、他遺跡から持ち込まれたと考えられる土製耳飾りは9点と、わずか2%を占めるにとどまった。しかし、これらの土製耳飾りは下ヶ戸宮前遺跡が土製耳飾りを多く生産していたと考えられる他の地域と何らかの交流があったことを示していると思われる。また、下ヶ戸宮前遺跡でも土製耳飾りを製作することが可能であったにもかかわらず、わざわざ遠隔の地の要素を持つ土製耳飾りが持ち込まれていたことから、これらの土製耳飾りが「婚姻」等のヒトの移動の結果によるものか、「交易」や「交換」といった意図的な物質移動の結果持ち込まれた「ブランド」であったものと考えられる。ここで見られる異質な耳飾りの多くは、下ヶ戸宮前遺跡で作られた土製耳飾りよりも技術的、審美的な観点からデザインの質が高いことから、「ブランド」としての価値や希少性があったと考えられないだろうか。

第5表 遺跡別有文と無文の土製耳飾り

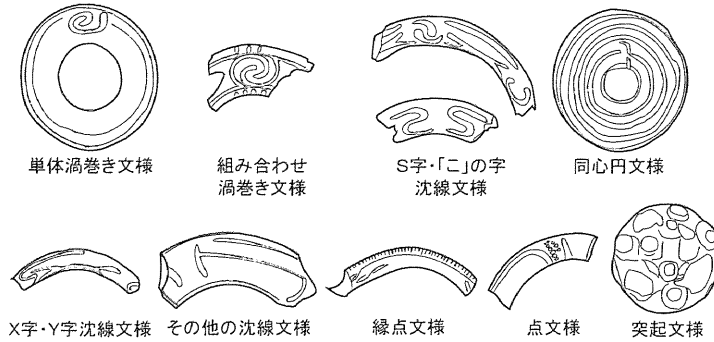
	有文	無文	不明	計
下ヶ戸宮前遺跡	228	155	23	406
千網谷戸遺跡	99	60	27	186
赤城遺跡	31	23	0	54
三輪野山遺跡	19	15	0	34

第6表 有文と無文の形態別個数

	環状形	臼形	糸巻形	計
有文	207	19	2	228
無文	129	19	6	154

第7表 有文と無文の大きさ別個数

	～1cm	1cm～	2cm～	3cm～	4cm～	5cm～	6cm～	7cm～	8cm～	不明
有文(表面)	0	1	4	11	13	23	48	36	11	81
有文(耳部)	0	2	6	10	20	29	54	24	1	82
無文(表面)	0	6	14	9	12	8	9	8	0	89
無文(耳部)	1	10	12	9	9	13	9	3	0	89



第8図 文様の種類の分類(筆者作成)

IV. 土製耳飾りのデザインに関する分析

次に、土製耳飾りに描かれている文様とその他の特徴を結びつけ、デザインの流行について述べたい。

1. 有文の土製耳飾りと無文の土製耳飾り

有文の土製耳飾りとは沈線や突起等の装飾文様が描かれているものである。一方、無文の土製耳飾りとは、全く文様の見られないもの、中央に浅い凹みがあるだけのもの、孔が開いているだけのものである。また、破損の程度が大きく全体像が把握できなかったものは不明として分類した。

有文の土製耳飾りと無文の土製耳飾りの個数を計測した結果、有文の土製耳飾りは228点、無文の土製耳飾りは155点であり、不明を除外すると、有文と無文の割合は約6:4となった(第5表)。よって、下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りは有文のものの方がやや多いと言える。

有文の土製耳飾りと無文の土製耳飾りの割合について他遺跡との比較を行った結果、他遺跡でも有文の土製耳飾りが約6割を占めた。したがって、下ヶ戸宮前遺跡における有文の耳飾りの割合は、関東地方の他遺跡と類似した傾向があると言える。

第8表 文様の種類の形態別個数

	環状形	臼形	糸巻形	計
単渦	22	1	0	23
組渦	20	0	0	20
S字・「こ」の字	8	0	0	8
同心円	0	3	0	3
X字・Y字	21	0	0	21
他沈線	177	10	1	188
縁点	37	3	0	40
点	41	3	2	46
突起	27	6	0	33

有文の土製耳飾りと無文の土製耳飾りの使い分けについては、無文のものが一般的に用いられ、有文のものが身につける人のステータスを示し、全ての人が身につけられるわけではなかったとする考え方がある一方で、無文のものが日常用、有文のものが祭祀用とする考え方もある(吉田2003)。下ヶ戸宮前遺跡の場合、出土数から考えると、前者の考え方は当てはまらないと思われる。

次に、形態別個数の分析を行った(第6表)。その結果、有文の土製耳飾りにおける環状形

の割合は、約9割を占めた。この傾向は、406点全体に占める環状形の割合の傾向とも調和的である。また、無文の土製耳飾りにおいては、約8割が環状形であった。これについては、臼形や糸巻形の割合がやや高いが、全体の傾向とかけ離れた値ではなかった。



透かし彫り アーチ・ブリッジ

第9図 施文法の種類の分類

第9表 施文法の種類の形態別個数

	環状形	臼形	糸巻形	計
透かし彫り	4	3	1	8
アーチ・ブリッジ	4	4	1	9

更に、直径別個数の分析を行った(第7表)。その結果、有文の土製耳飾りにおいては、表面と耳にかかる部分の直径別個数が、全体の傾向と同様の値を示した。しかし、無文の土製耳飾りにおいては、全体の傾向に比べ、小型の土製耳飾りが多いことが判明した。上記に述べたように、無文の土製耳飾りの形態別個数は全体の傾向からかけ離れたものではない。したがって、無文の土製耳飾りの大きさの偏りは、土製耳飾りの形態に影響されたものではないと言える。

この結果から、有文の土製耳飾りは祭祀用、無文の土製耳飾りは日常用という一般的に考えられている区別は、全てのケースには当てはまらなかったと考えられる。

2. 土製耳飾りの文様・施文法と形態の関係

土製耳飾りの文様の種類については、単体渦巻き文様、組み合わせ渦巻き文様、S字・「こ」の字沈線文様、同心円文様、X字・Y字沈線文様、その他の沈線文様、縁点文様、点文様、突起文様の9種に分類した(第8図)。これらは、下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りの中で一般的にみられるものや、注目に値する特殊な文様である。下ヶ戸宮前遺跡からは縄文時代後期と晩期の土製耳飾りが出土しているため、文様についても後期にみられるものと晩期にみられるものが認められる。しかし、今回は各文様のみられる土製耳飾りの個数に分析の重点を置くため、時系列的なデザインの変化については触れないものとする。以下では、この分類をもとに、文様

第10表 文様の種類の大きさ別個数

	1cm～	2cm～	3cm～	4cm～	5cm～	6cm～	7cm～	8cm～	不明
単渦	0	0	1	2	3	6	2	1	8
組渦	0	0	0	2	0	5	10	1	2
S字・「こ」の字	0	0	0	0	0	1	4	3	0
同心円	0	1	0	2	0	0	0	0	0
X字・Y字	0	0	0	0	1	8	9	2	1
他沈線	1	3	6	7	19	40	32	10	70
縁点	0	0	1	3	1	8	12	4	11
点	0	0	4	4	2	11	8	4	13
突起	0	1	2	2	4	11	3	1	9

第11表 施文法の種類の大きさ別個数

	1cm～	2cm～	3cm～	4cm～	5cm～	6cm～	7cm～	8cm～	不明
透かし彫り	1	0	2	0	1	1	3	0	0
アーチ・ブリッジ	0	1	4	1	1	1	0	0	1

の種類ごとに形態別個数の分析を行った(第8表)。

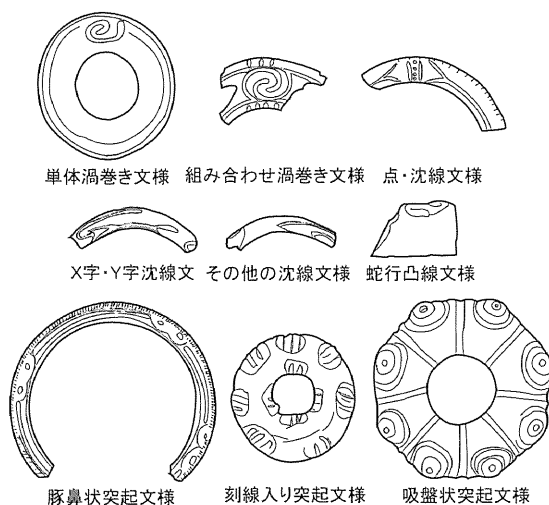
その結果、描かれる土製耳飾りの形態に偏りのある文様の種類が認められた。例えば、単体渦巻き文様や組み合わせ渦巻き文様は環状形が圧倒的多数を占めた。単体渦巻き文様の中で1点の例外である臼形は、千網谷戸遺跡で作られたと思われるものであった。また、渦巻き文様と類似しているS字・この字沈線文様も、環状形にしかみられなかった。また、X字・Y字沈線文様も同様であった。一方、同心円文様においては臼形にしかみられなかった。

文様による形態の偏りは、おそらく下ヶ戸宮前遺跡内でのルールや流行が関係していると考えられる。例えば、2種類の渦巻き文様については、他遺跡から持ち込まれたと思われる臼形の1点以外が全て環状形の土製耳飾りであった。このことから、渦巻き文様を環状形の土製耳飾りに描くというルールは下ヶ戸宮前遺跡特有のものであったと考えられる。

施文法の種類については透かし彫りとアーチ・ブリッジに注目し、文様の種類と同様の分析を行った(第9図)。これらの土製耳飾りにおいては、全体の傾向と比べ、臼形や糸巻形の土製耳飾りの割合が高かった(第9表)。アーチ・ブリッジにおいて、このような偏りが見られた理由は、中心が空洞であるために大型化する環状形よりも、密度が高いために小型な臼形や糸巻形の土製耳飾りのほうが壊れにくかったという製作上の技術的な理由によると考えられる。

3. 土製耳飾りの文様・施文法と大きさの関係

まず、文様の種類ごとに直径別個数の分析を行った(第10表)。その結果、文様の種類によっ



第10図 共有される文様の種類の分類

デザインからみる縄文時代後晩期の土製耳飾り

第12表 共有される文様の見られる遺物

	単渦	組渦	点・沈線	X字・Y字	他沈線	蛇行凸線	豚鼻	刻線突起	吸盤
土器	○	○	○	○	○	○	○	○	○
土偶	○	○	○	—	○	—	—	—	○
石棒	—	—	○	—	○	—	—	—	—
石版	○	○	○	—	○	—	—	—	—

第13表 共有される文様の見られる土製耳飾り

	単渦	組渦	点・沈線	X字・Y字	他沈線	蛇行凸線	豚鼻	刻線突起	吸盤
No.	19	1	1	1	132	77	28	6	16
	21	9	13	5	134	148	61	121	31
	25	11	14	7	146	164	69		75
	58	12	26	8	153	207	72		119
	59	20	33	10	156				137
	60	30	42	13	165				170
	63	32	46	14	211				
	75	43	49	20					
	83	45	56	22					
	141	48	66	23					
	155	50	73	24					
	168	51	90	27					
	169	53		30					
		60		33					
		74		55					
		86		56					
				57					
				65					
				79					
				132					
				152					
計	13	16	12	21	7	4	4	2	6

て、土製耳飾りの大きさに偏りが認められた。例えば、組み合わせ渦巻き文様、S字・「こ」の字沈線文様、X字・Y字沈線文様においては、大型の土製耳飾りに偏っていた。これらの文様は環状形の土製耳飾りに描かれているため、大型の土製耳飾りに数が偏ったと考えられる。一方、単体渦巻き文様のように、環状形に偏っていても、直径別個数が全体の傾向と同様の文様も認められた。

大型の土製耳飾りは、耳の穿孔の直径が大きい比較的高年齢の人が装着していたと考えられることから、上記の文様が高年齢の人に使用されたものであったことも考えられる。

一方、同心円文様は小型の土製耳飾りに偏って見られる。同心円文様の描かれている土製耳

第14表 文様別個数

	計
単渦	23
組渦	20
S字・「こ」の字	8
同心円	3
X字・Y字	21
他沈線	188
縁点	40
点	46
突起	33

飾りは全てが白形であったため、小型のものへ偏った結果になったと考えられる。

施文法の種類ごとに直径別個数を分析した結果も、それぞれに特殊な傾向がみられた(第11表)。透かし彫りについては、下ヶ戸宮前遺跡で作られたと思われるものは大型の土製耳飾りであり、他の遺跡から持ち込まれたと思われるものは小型の土製耳飾りであった。したがって、下ヶ戸宮前遺跡では大型の土製耳飾りにも透かし彫りを施していたと考えられる。

また、アーチ・ブリッジにおいては、小型の土製耳飾りに多く見られた。この施文法のみられる大型の土製耳飾りは、破片として

2点のみが出土した。したがって、この施文法が大型の土製耳飾りに施されることは少なかったと考えられる。その理由としては上記に述べたとおり、大型の土製耳飾りに施した場合、破損しやすかったことが考えられる。

同心円文様やアーチ・ブリッジが小型の土製耳飾りに偏った理由としては、大型の土製耳飾りと同様に、年齢によるものも考えられる。金成氏と宮尾氏によると、関東地方の土製耳飾りが出土した遺跡には、形態と文様別に土製耳飾りの大きさの偏りがみられることが分かっている(金成・宮尾1996)。また、小型の土製耳飾りが研究対象となった全ての遺跡にみられることから、それらの役割は耳の孔を伸張する際に用いられるものと、通過儀礼の際に用いられるものがあつたとしている。このことから、上記のような小型の土製耳飾りは、年齢の低い人に身につけられていた可能性も考えられる。

4. 土製耳飾り以外の遺物の文様との比較

下ヶ戸宮前遺跡から出土した土製耳飾り以外の遺物には土器、土偶、石棒、石版などがある。これらには、土製耳飾りと共有されている文様が認められるものがある。そこで、これらの遺物の文様と土製耳飾りの文様の関係についての分析を行った。まず、これらの遺物と土製耳飾りで共有されている文様の種類としては、単体渦巻き文様、組み合わせ渦巻き文様、点・沈線文様、X字・Y字沈線文様、その他の沈線文様、蛇行凸線文様、豚鼻状突起文様、刻線入り突起文様、吸盤状突起文様の9種が挙げられる(第10図、第12表)。

これらの文様が見られる土製耳飾りは74点であった(第13表)。土製耳飾りと共有されている文様の中で最多のものは、土器に見られるX字・Y字沈線文様であった。この文様は土製耳飾りの文様の種類としても多く、注目すべきである。また、下ヶ戸宮前遺跡の土器の文様に関しては縄文時代後期や晩期にみられるものである。従って、土器と土製耳飾りに共通する文様は、縄文時代後晩期の土器の文様と類似するものが多いと言える。

また、土製耳飾りの文様と土製耳飾り以外の遺物の文様の間には、文様の組み合わせ方や配し方にも共通点が認められた。例えば、渦巻き文様とX字・Y字沈線文様の組み合わせと、点・沈線文様とX字・Y字沈線文様の組み合わせは多く共有されていた。また、豚鼻状突起の見ら

れる4点の特徴は、2つの突起の間に必ず一本の横沈線を挟んでいることであるが、この組み合わせは土器にも見られた。文様の配し方としては、土製耳飾りと土器の間で、蛇行凸線文様の設置される位置に共通点が認められた。この文様が設置される位置は土製耳飾りの外面の円周上である。一方土器の場合、この文様は口縁部に装飾するように配されている。

現代でも、様々な道具に共通の文様が用いられ、特に好まれている文様は広範囲の道具に描かれる。上記の結果からは、このような傾向が縄文時代の道具にも存在した可能性が考えられる。

一方、土製耳飾りにのみみられる文様や施文法が認められる土製耳飾りのほとんどは、沈線で文様が描かれたものであった。また、ほぼ完形の状態で残存していた土製耳飾りは12点であったが、その中で文様が等間隔、線対称、点対称に描かれているものは10点であった。残存率の関係で全容が明らかでない土製耳飾りの中にも、文様の繰り返し認められた。そのため、等間隔や繰り返しなどの規則性を意識して文様を描いた土製耳飾りが多数を占めたと思われる。

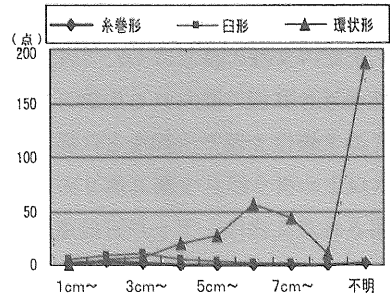
また、土製耳飾りに特有の文様や施文法の中には、デザインが大変類似しているものが数点存在した。しかし、大多数の土製耳飾りにおいては、類似品が見られなかったため、土製耳飾りに特有の文様や施文法の見られる土製耳飾りでは、類似品を大量に生産することが行われなかったと考えられる。

5. デザインの流行

まず、文様の描かれ方と、文様の種類別個数について考察したい。

文様の描かれ方については沈線で描かれているものが多く、下ヶ戸宮前遺跡では文様を凸線で描くよりも、沈線で描くことが主流であったと考えられる。また、下ヶ戸宮前遺跡でみられる土製耳飾りの文様は、縄文時代晩期中葉にみられるものに類似しているものが多い。

文様の種類別個数については、第14表のような結果となった。様々なモチーフを含んだその他の沈線文(188点)を除外して検討すると、土製耳飾りに最も多く描かれていた文様は点文様であった。この文様のみられる土製耳飾りの殆どには、他の文様も沈線文様で描かれている。次点は縁点文様であり、以下に突起文様、単体渦巻き文様、X字・Y字沈線文様が続いた。また、これらの文様のみられる土製耳飾りの大多



第11図 形態別大きさの比較

第15表 6cm台と7cm台の環状形の土製耳飾りの文様

文様	土製耳飾りの個数
単体渦巻き文様	8
組み合わせ渦巻き文様	15
S字・「こ」の字沈線文様	5
同心円文様	0
X字・Y字沈線文様	17
その他の沈線文様	72
縁点文様	18
点文様	18
突起文様	13

数にも、沈線で描かれた他の文様が認められた。

上記の文様の種類については、土製耳飾り以外の遺物にもみられるものがある。例えば、単体渦巻き文様の見られる土製耳飾りは、406点全体の個数から考慮すると大きな値ではないが、この文様は土器や土偶など、様々な遺物にも用いられていた。

以上のように、土製耳飾りの中で多く採用された文様や、土製耳飾り以外の遺物にも多く使用された文様は、下ヶ戸宮前遺跡を形成した集団において流行していた文様であると考えられる。しかし、上記で述べたように、下ヶ戸宮前遺跡で見られる土製耳飾りの文様には縄文時代晩期中葉に類似するものが多い。そのため、この流行は一時的なものであった可能性も考えられる。

次に、土製耳飾りの形態と大きさの流行について考察した。まず、下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りは約9割が環状形である。そのため、下ヶ戸宮前遺跡では環状形が好まれていたと考えられる。

ここで、土製耳飾りの形態別の大きさについてみてみたい。その結果、臼形や糸巻形には2cm台から3cm台の土製耳飾りが多数を占めるが、環状形においては6cm台と7cm台の土製耳飾りが多数を占めることが判明した(第11図)。ここには、遺跡に残されなかった木製や骨製の耳飾りが含まれていないため、すべての耳飾りの特徴を述べることはできないが、少なくとも、土製の耳飾りに限って考察するのであれば、下ヶ戸宮前遺跡で最も流行していた土製耳飾りは、環状形で、大きさが6cm台から7cm台のものであったということが言える。

上記から、土製耳飾りの文様の種類の中で流行していたものと、形態や大きさの中で流行していたものが判明した。以下では、この2つの流行を総合して考察する。406点全体の土製耳飾りから、環状形で6cm台と7cm台のものについて、文様の種類別に個数を分析してみた(第15表)。その結果、その他の沈線文様を除外すると上位5種類の文様は、文様の種類別個数の上位5種類とほぼ一致した。

よって、下ヶ戸宮前遺跡を形成した集落においては文様、形態、大きさが上記のような土製耳飾りが流行していたと考えられる。

V. まとめ

下ヶ戸宮前遺跡に着目して分析を行った結果、多くの土製耳飾りに描かれる傾向のある文様の存在や、複数の遺物間で共有された文様の存在が認められたことから、土製耳飾りのデザインには何らかの嗜好性、すなわち、流行が存在していたと考える。しかし、これらの流行は一時的なものであった可能性があり、時系列的なデザインの変化も含めた流行の考察については、今後の課題としたい。

また、文様や施文法によって、土製耳飾りの大きさや形態に偏りが認められたことから、土製耳飾りのデザインを決定する際には、下ヶ戸宮前遺跡内のある規制、ルールに従っていた可能性が示唆される。特に、大型の土製耳飾りに多くみられる文様があることから、縄文時代後晩期に年齢によって使用されるデザインが存在していたことが考えられる。

また、デザインに何らかの流行がみられたことや、他遺跡から質の高いデザインの土製耳飾りが持ち込まれたであろう事例から、少なくとも縄文時代後晩期の人々は土製耳飾りのデザインを強く意識していたのではないかと考えられる。土製耳飾りのデザインの質は、現代の私たちから見ても卓越したものである。そのような耳飾りを大量に製作、利用していたということは、縄文人が土製耳飾りのデザインやそれを身に付けることに対して、強い意識を持っていたことの現れであると言える。

謝辞

最後になりましたが、未発表資料にもかかわらず、貴重な資料を提供してくださった我孫子市教育委員会の岡村眞文氏と、資料見学の際に御対応くださいました文化財整理室の皆様にご感謝申し上げます。

註

本論文で扱った土製耳飾りの図版は、千葉県我孫子市教育委員会によって作成された実測図を、筆者がトレースしたものである。その際、本稿の便宜のために資料番号を新たにつけたが、本来の実測図に付随する遺物番号については第16表に記している。また、下ヶ戸宮前遺跡出土の資料に関する報告書は我孫子市教育委員会によって現在整理中である。

引用・参考文献

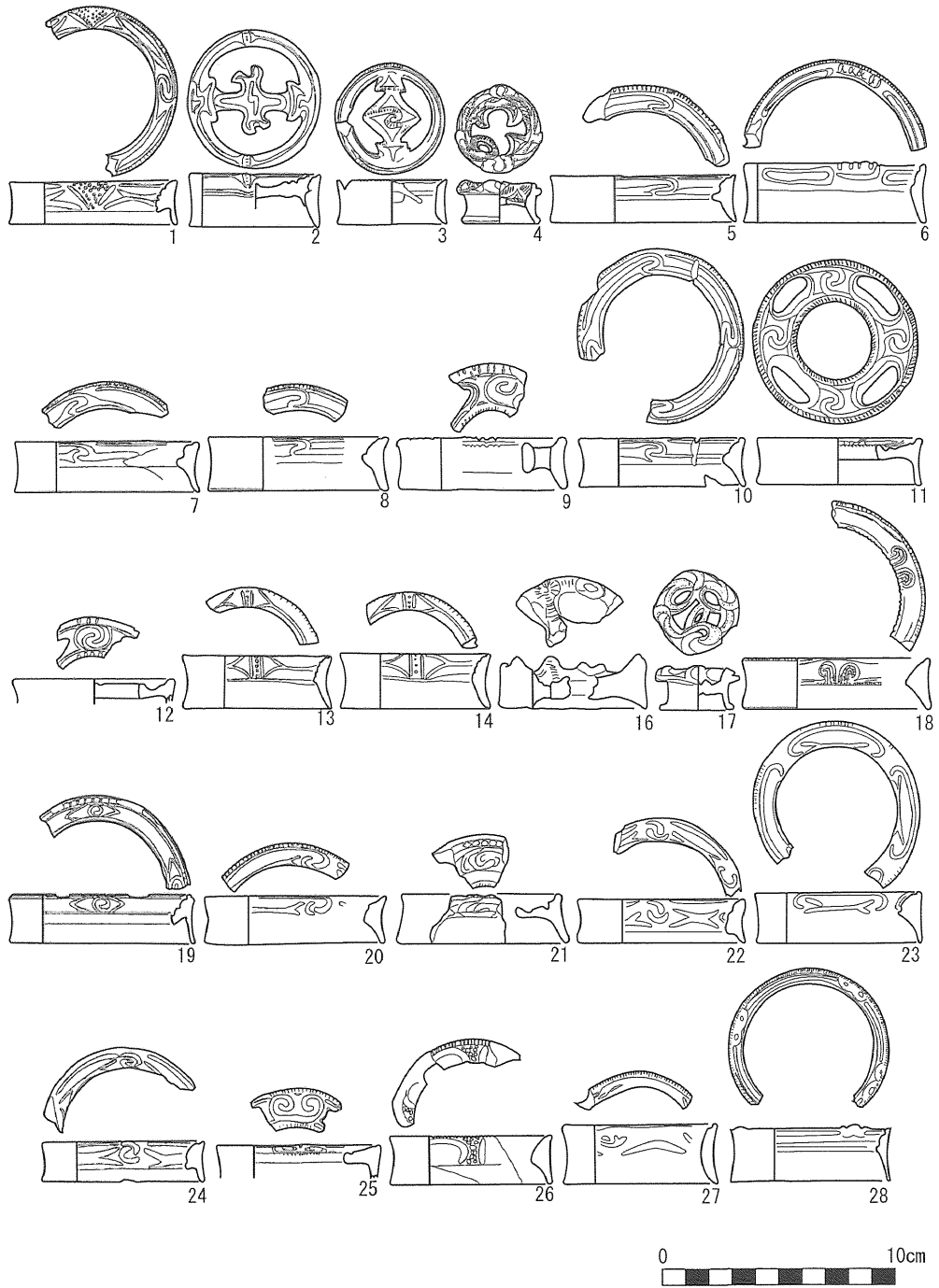
- 我孫子市史編さん委員会編 『我孫子市史 原始・古代・中世篇』我孫子市教育委員会。
金成南海子・宮尾 亨 1996 「土製耳飾の直径」『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯 49-88頁。
桐生市教育委員会 1978 『千網谷戸遺跡発掘調査報告』桐生市文化財調査報告第3集 桐生市教育委員会。
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
千葉県史料研究財団 2000 『千葉県の歴史 資料編考古1 旧石器・縄文時代』千葉県。
千葉県文化財センター 1996 『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第276集 千葉県土木部。
千葉県文化財センター 2001 『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第399集 千葉県土木部。
土肥 孝 1990 「美・芸術そして独占のはじまり」文化財保護委員会監修『月刊文化財』第326号 第一法規出版 4-11頁。
春成秀爾 1997 『歴史発掘④ 古代の装い』講談社。
吉田泰幸 2003 「縄文時代における土製栓状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』第19号 29-54頁。

第 16-1 表 トレース図の土製耳飾りの詳細

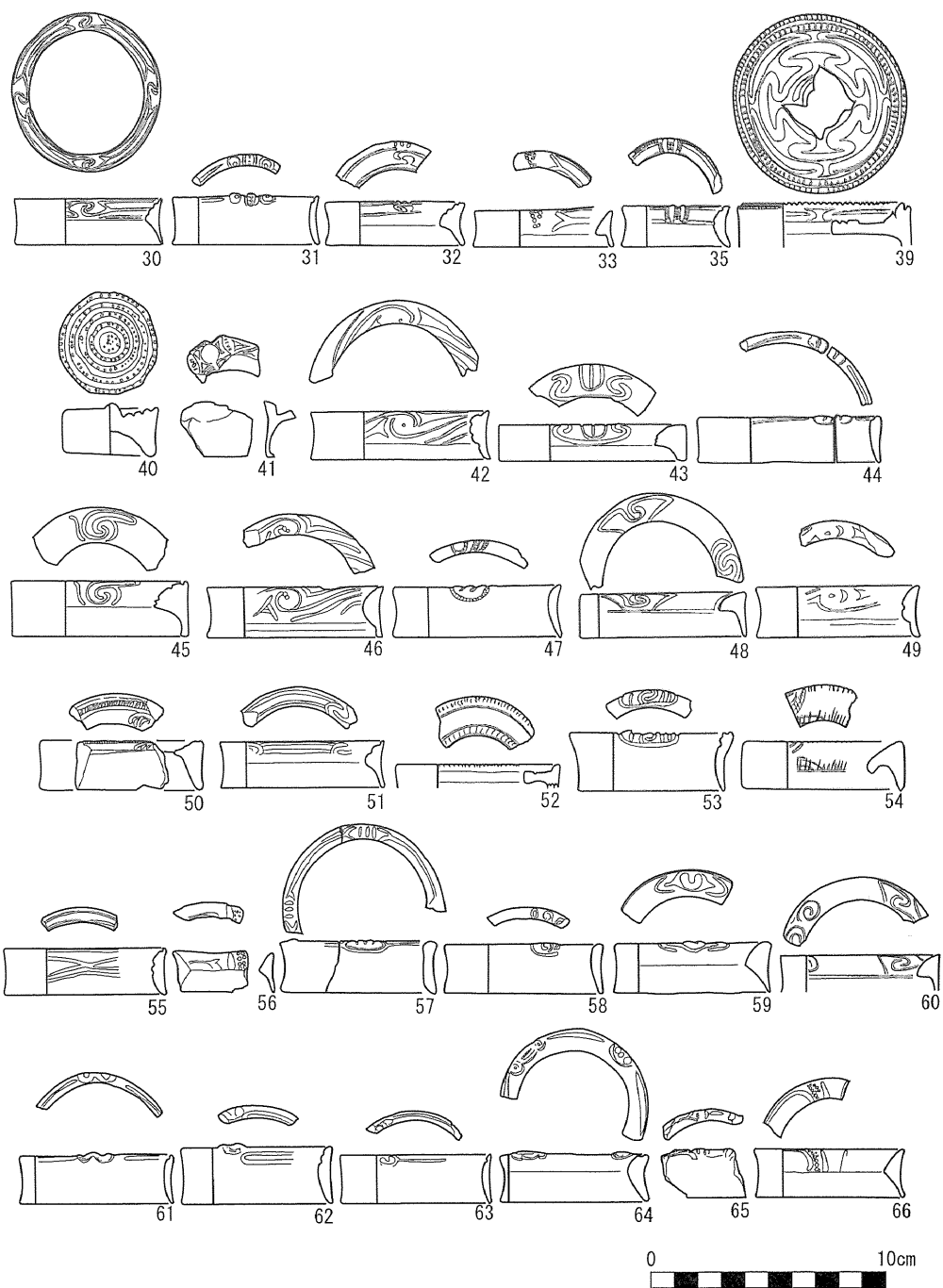
番号	実測番号	形態	表面	耳部	出土場所	番号	実測番号	形態	表面	耳部	出土場所
1	007-24	環状形	7.3	7.1	7号住居址	45	007-30	環状形	7.6	7.6	7号住居址
2	014-14	環状形	5.7	5.5	14号住居址	46	007-49	環状形	7.6	7.2	7号住居址
3	007-77	環状形	4.8	4.5	7号住居址	47	014-29	環状形	7.4	6.9	14号住居址
4	B2-25-01	臼形	3.7	3.0	グリッド	48	005-32	環状形	7.2	7.1	5号住居址
5	007-20	環状形	8.1	7.8	7号住居址	49	007-60	環状形	7.1	6.7	7号住居址
6	014-11	環状形	8.0	7.6	14号住居址	50	003-06	環状形	7.1	6.9	3号住居址
7	007-22	環状形	8.0	7.7	7号住居址	51	007-50	環状形	7.1	6.8	7号住居址
8	007-63	環状形	7.9	7.5	7号住居址	52	014-30	環状形	7.1	7.0	14号住居址
9	005-37	環状形	7.4	7.1	5号住居址	53	004-10	環状形	7.0	6.2	4号住居址
10	007-53	環状形	7.2	6.9	7号住居址	54	001-33	環状形	7.0	7.0	1号住居址
11	003-02	環状形	7.1	6.9	3号住居址	55	007-44	環状形	7.0	6.8	7号住居址
12	013-01	環状形	7.0	6.7	13号住居址	56	006-31	環状形	7.0	6.7	6号住居址
13	001-22	環状形	6.4	6.0	1号住居址	57	006-23	環状形	6.9	6.7	6号住居址
14	001-23	環状形	6.5	6.1	1号住居址	58	014-34	環状形	6.9	6.6	14号住居址
16	005-43	臼形	6.5	6.3	5号住居址	59	014-09	環状形	6.8	6.5	14号住居址
17	006-36	糸巻形	3.6	2.6	6号住居址	60	001-27	環状形	6.7	6.7	1号住居址
18	006-22	環状形	8.0	7.9	6号住居址	61	014-45	環状形	6.6	6.4	14号住居址
19	007-36	環状形	8.0	7.8	7号住居址	62	014-33	環状形	6.5	6.2	14号住居址
20	001-28	環状形	7.8	7.5	1号住居址	63	014-31	環状形	6.5	6.4	14号住居址
21	003-07	環状形	7.4	6.8	3号住居址	64	014-12	環状形	6.5	6.0	14号住居址
22	007-23	環状形	7.4	7.0	7号住居址	65	006-27	環状形	6.5	6.0	6号住居址
23	007-29	環状形	7.2	7.0	7号住居址	66	007-35	環状形	6.5	6.1	7号住居址
24	007-14	環状形	7.2	6.8	7号住居址	67	013-03	環状形	6.5	6.3	13号住居址
25	014-25	環状形	7.2	6.8	14号住居址	68	006-25	環状形	6.4	6.0	6号住居址
26	007-67	環状形	7.1	6.8	7号住居址	69	014-13	環状形	6.3	5.9	14号住居址
27	005-33	環状形	6.8	6.3	5号住居址	70	014-41	環状形	6.3	6.1	14号住居址
28	001-26	環状形	6.8	6.1	1号住居址	71	007-16	環状形	6.3	6.0	7号住居址
30	007-28	環状形	6.5	6.1	7号住居址	72	014-40	環状形	6.1	5.9	14号住居址
31	005-36	環状形	6.3	6.1	5号住居址	73	007-71	環状形	6.0	5.8	7号住居址
32	007-34	環状形	6.1	5.6	7号住居址	74	014-39	環状形	6.0	5.9	14号住居址
33	007-42	環状形	6.1	5.8	7号住居址	75	014-15	環状形	6.0	5.8	14号住居址
35	005-35	環状形	4.2	4.3	5号住居址	76	014-42	環状形	6.0	5.7	14号住居址
39	005-34	臼形	7.4	7.3	5号住居址	77	002-03	環状形	6.0	5.8	2号住居址
40	006-19	臼形	4.0	3.9	6号住居址	79	007-32	環状形	5.9	5.8	7号住居址
41	B2-66-02	糸巻形	不明	不明	グリッド	80	014-32	環状形	5.7	5.5	14号住居址
42	007-37	環状形	8.1	7.6	7号住居址	81	014-51	環状形	5.5	5.3	14号住居址
43	B2-35-01	環状形	8.0	8.0	グリッド	83	005-30	環状形	5.3	5.2	5号住居址
44	014-72	環状形	7.9	7.8	14号住居址	84	014-37	環状形	5.2	4.9	14号住居址

第 16-2 表 トレース図の土製耳飾りの詳細

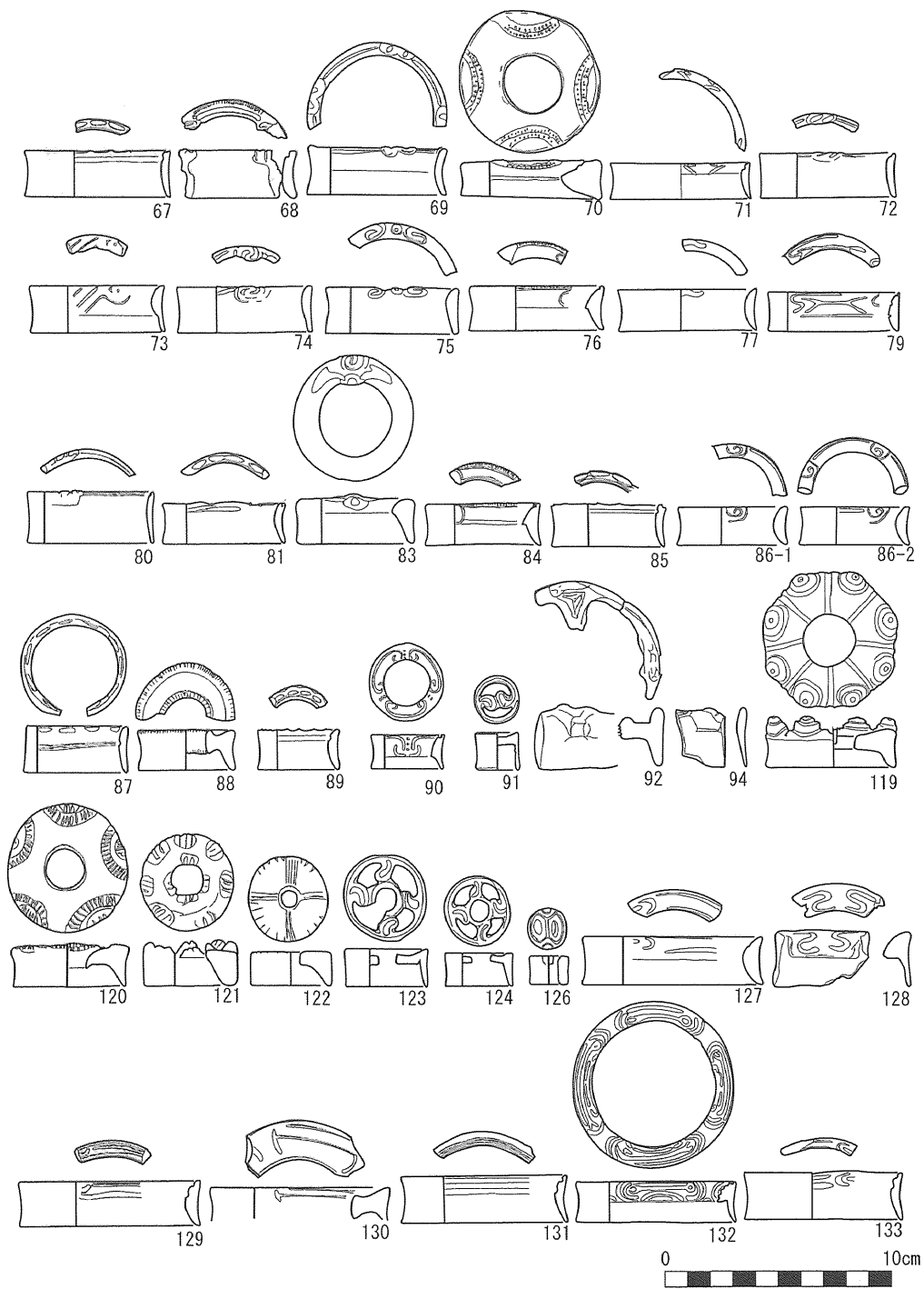
番号	実測番号	形態	表面	耳部	出土場所	番号	実測番号	形態	表面	耳部	出土場所
85	004-11	環状形	5.0	4.9	4号住居址	149	014-43	環状形	6.4	6.2	14号住居址
86	001-29	環状形	4.8	4.6	1号住居址	150	007-15	環状形	6.1	5.9	7号住居址
87	014-26	環状形	4.7	4.5	14号住居址	151	013-02	環状形	6.1	6.0	13号住居址
88	014-22	環状形	4.4	4.1	14号住居址	152	007-25	環状形	6.0	5.8	7号住居址
89	014-23	環状形	3.7	3.5	14号住居址	153	007-68	環状形	6.0	5.6	7号住居址
90	007-75	環状形	3.3	3.0	7号住居址	154	007-64	環状形	6.0	5.6	7号住居址
91	006-16	環状形	2.0	1.8	6号住居址	155	014-18	環状形	5.9	5.9	14号住居址
92	006-24	環状形	不明	不明	6号住居址	156	007-33	環状形	5.8	5.7	7号住居址
94	014-62	環状形	不明	不明	14号住居址	157	014-38	環状形	5.7	5.6	14号住居址
119	005-29	臼形	5.8	5.6	5号住居址	158	014-35	環状形	5.7	5.4	14号住居址
120	006-20	臼形	5.0	4.9	6号住居址	159	001-21	環状形	5.6	5.5	1号住居址
121	005-38	臼形	4.2	4.2	5号住居址	160	007-18	環状形	5.6	5.4	7号住居址
122	005-39	臼形	3.7	3.6	5号住居址	161	007-41	環状形	5.3	5.1	7号住居址
123	014-27	臼形	3.6	3.6	14号住居址	162	013-07	環状形	5.1	4.8	13号住居址
124	014-28	臼形	3.0	3.0	14号住居址	164	007-78	環状形	5.0	4.8	7号住居址
126	014-44	臼形	1.7	1.7	14号住居址	165	138-01	環状形	5.0	4.9	土坑
127	007-66	環状形	8.1	7.8	7号住居址	166	007-51	環状形	5.0	4.7	7号住居址
128	006-26	環状形	8.0	7.7	6号住居址	167	007-54	環状形	5.0	4.7	7号住居址
129	007-62	環状形	8.0	7.9	7号住居址	168	014-10	環状形	4.7	4.4	14号住居址
130	001-30	環状形	8.0	7.7	1号住居址	169	014-20	環状形	4.7	4.7	14号住居址
131	007-38	環状形	7.5	7.0	7号住居址	170	165-03	環状形	4.6	4.2	土坑
132	007-27	環状形	7.2	6.9	7号住居址	171	007-69	環状形	4.6	4.3	7号住居址
133	007-46	環状形	7.1	6.8	7号住居址	172	013-04	環状形	4.0	3.8	13号住居址
134	007-52	環状形	7.1	6.8	7号住居址	177	014-47	環状形	不明	不明	14号住居址
135	007-58	環状形	7.1	6.8	7号住居址	183	007-84	環状形	不明	不明	7号住居址
136	007-59	環状形	7.1	6.8	7号住居址	185	014-46	環状形	不明	不明	14号住居址
137	003-05	環状形	7.1	6.9	3号住居址	205	007-72	環状形	不明	不明	7号住居址
138	007-39	環状形	7.1	6.9	7号住居址	207	006-28	環状形	不明	不明	6号住居址
139	007-21	環状形	7.0	6.5	7号住居址	208	007-82	環状形	不明	不明	7号住居址
140	014-36	環状形	6.9	6.8	14号住居址	211	007-83	環状形	不明	不明	7号住居址
141	014-16	環状形	6.8	6.6	14号住居址	222	007-40	臼形	4.5	4.2	7号住居址
142	005-31	環状形	6.8	6.7	5号住居址	223	005-45	臼形	3.5	3.2	5号住居址
143	007-09	環状形	6.7	6.7	7号住居址	224	003-03	臼形	3.5	3.5	3号住居址
144	014-80	環状形	6.6	6.4	14号住居址	225	005-44	臼形	3.0	2.8	5号住居址
145	013-05	環状形	6.5	6.1	13号住居址	226	001-20	臼形	3.0	2.2	1号住居址
146	007-31	環状形	6.5	6.1	7号住居址	227	165-04	臼形	2.8	2.8	土坑
147	007-65	環状形	6.5	6.2	7号住居址	228	004-09	臼形	2.7	2.1	4号住居址
148	013-06	環状形	6.5	6.3	13号住居址						



第 12 図 下ヶ戸宮前遺跡の有文の土製耳飾り (1)

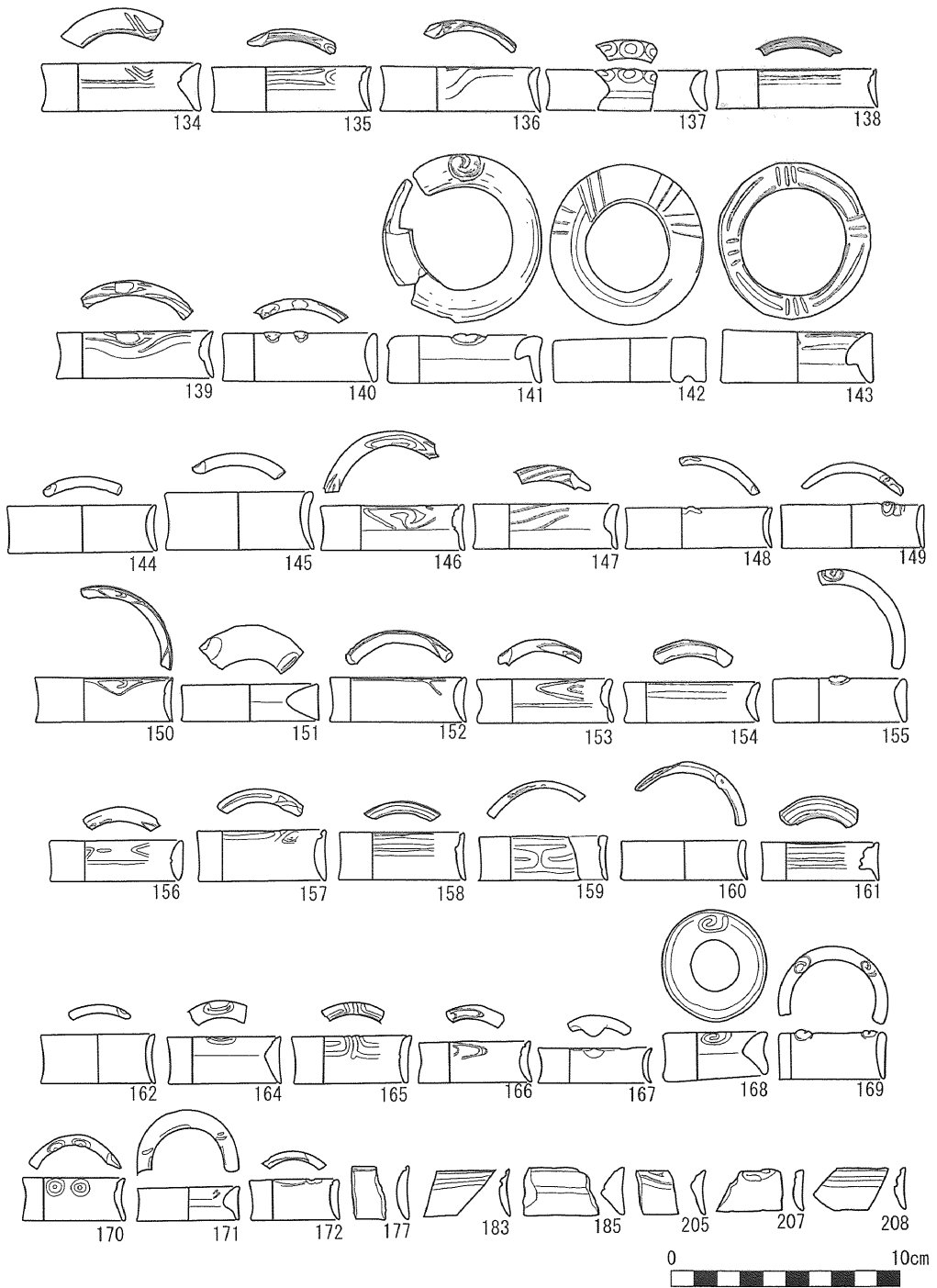


第13図 下ヶ戸宮前遺跡の有文の土製耳飾り (2)

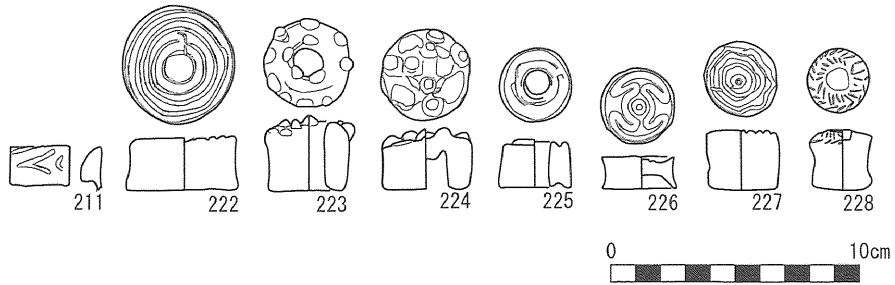


第 14 図 下ヶ戸宮前遺跡の有文の土製耳飾り (3)

デザインからみる縄文時代後晩期の土製耳飾り



第15図 下ヶ戸宮前遺跡の有文の土製耳飾り (4)



第 16 図 下ヶ戸宮前遺跡の有文の土製耳飾り (5)

Designs of earthen ear ornaments in the Late and Final *Jomon* periods: a case study at the Sagetomiyamae site in Abiko, Chiba

SUGIYAMA, Ayaka

Over 400 earthen ear ornaments dating back to the Late and Final *Jomon* periods were excavated at the Sagetomiyamae site located in Abiko, Chiba. This paper aims to analyse them with regard to the designs manifested in their decorative motifs and forms.

A majority of the ornaments were ring-shaped and tended to measure as much as approximately 6cm in diameter. Measurements of the portion of the ornament that passes through the earlobe reveal that its diameter increased by 5mm increments. This may reflect the fact that ornaments could have been modified to larger sizes as openings in the earlobes stretched over time. Design analysis also revealed that motifs found on the ornaments related to their shape and size. This may indicate that motifs were chosen according to certain social contexts such as the wearer's age and status through ceremonial rites of passage. Motifs varied and some are also depicted in other items such as pottery and polished phallic-shaped stone rods known as *sekibo*. Fashion, taste and social conventions of the time could explain the preponderance of certain motifs. Motifs can be found in the interior rims of larger ring-shaped ornaments and, thus, it is conceivable that the *Jomon* people of these periods consciously selected the pattern and shape of ornaments in order to convey a strong sense of design in what they wore.